

佐賀の乱における記念・顕彰の景観化

大平 晃久（人文社会科学域（教育学系）教員）

I はじめに

負の記憶、すなわち戦争や事故、事件、あるいは災害に関する記憶は、様々に景観化されている。遺構の保存や復元、記念碑の建立など、景観化の様相やプロセスは、これまで注目され、多くの報告や議論がおこなわれてきた¹⁾。

本稿は、1874（明治7）年に発生した明治初期の士族反乱の一つ、佐賀の乱を取り上げる。ナショナル・ヒストリーでは「反乱」とされ、明らかに負の記憶の範疇に入るこの出来事が、景観のなかでいかに記念・顕彰されているかに注目したい。なお、佐賀の乱は、地元佐賀では「乱」というネガティブな呼び方を嫌ってか、「佐賀の役」あるいは「佐賀戦争」とよばれることもあるが、本稿では一般的な名称として「佐賀の乱」という呼称を用いる。

本稿は次の2点を目的としている。一つは、佐賀の乱について景観化された記念・顕彰の全体像を提示することである。佐賀の乱を扱った研究はいうまでもなく数多く、負の記憶の側面に注目したものとしても、佐賀の乱の戦死者の祭祀や顕彰を詳細に調査・報告した今井による研究²⁾がある。ただし、景観面での記念・顕彰に照射する本稿と完全に重なるものではない。

もう一つは、佐賀の乱における記念・顕彰の景観化を方向づけてきた枠組に関する考察から、モニュメントに共通する議論につなげることである。関連して、フットによる負の記憶の景観化の4類型の検討を行う。アメリカの歴史地理学者のフット Foote, K.E.は、戦争や大量殺人、事故の記憶がどのように景観に表現されているかを考察し、「聖別 sanctification」、「選別 designation」、「復旧 ratification」、「抹消 obliteration」という4類型を提示している³⁾。本稿では、記憶の景観化を分析する枠組としてこれら4類型をどうとらえ直せるか考察する。

II 佐賀の乱の経緯と記念・顕彰

(1) 佐賀の乱の経緯 まずは佐賀の乱とはどのような出来事であったか、簡単にみておく⁴⁾。佐賀の乱は、1874（明治7）年2月に、佐賀士族の2つの党派、征韓党と憂国党の結集の動きに対し、熊本鎮台が出兵したことに始まる。戦闘自体は2月16日～27日の12日間で終わった。『佐賀県史』によれば、反乱の背景としては、前年の干ばつ・風水害と米相場暴騰、復古反政府的な九州地方農民暴動、1872年の地租改正第二次処分、士族の家禄処分反対運動などで、不穏な情勢が高まっていたこと、さらに佐賀権力が不在であったことがあった。旧藩士の党派のうち、征韓党が明治維新を肯定し、より国権を伸長させる政策を求める立場を取り、中下級士族中心であったのに対し、憂国党は復古的反政府の立場で、上級士族が多かったとされる。なおこれらの他に中立党があり、戦闘では政府軍側につくことになる。

これら、征韓党と憂国党に、江藤新平と島義勇^{よしたけ}がそれぞれ合流したことで反乱に発展していく。江藤新平は手明鍵^{てあけかり}という下級武士層の出身で、藩主・鍋島直正に見いだされ、新政府で活躍することに

なる。初代文部大輔（文部卿空席）、初代司法卿、参議を務め、西郷隆盛とともに征韓論（朝鮮への使節派遣）を唱えるも実現せず、下野していた（1873年10月）。佐賀から征韓党員が江藤と副島種臣に帰郷と首領就任要請のために上京したのを受け、佐賀不平士族の動きを抑えるために帰郷した（1874年1月）。一方、島義勇は佐賀藩上級家臣の出身で、初代開拓使主席判官、初代秋田権令を歴任していた。三条実美の依頼により地元鎮撫のために1874年2月帰郷したが、その途中、佐賀鎮圧の命を帯びて赴任する岩村高俊佐賀権令と同船し、佐賀人を罵倒する岩村と衝突、小競り合いになっていたという。江藤と島は長崎で会談し、2月12日、岩村権令とともに佐賀に入る熊本鎮台兵が「入城のさいに何らの布告もなければ、一戦もやむをえず」と、「決戦の議」を行う⁵⁾。熊本鎮台兵のうち、332名が2月15日に佐賀県庁（佐賀城二ノ丸）に入り、それを佐賀側が取り囲むなかで、両者は2月16日午前1時ごろに衝突し、戦闘が始まった。

開戦に至った理由として、『佐賀市史』は、中立党の誇張した密告が大きな要因であるとしている⁶⁾。また、『佐賀県史』は、憂国党の過激な動きに征韓党が引き込まれたとし、憂国党の封建的な姿勢、大隈重信との対立が背景にあったとする⁷⁾。一方、毛利敏彦は、佐賀の不穏な動き、征韓党の結集とされたのは大久保利通の江藤に対する個人的な恨み、嫉妬によるこじつけ・捏造と挑発の結果であったと断じている⁸⁾。

征韓党、憂国党の兵力は約3,000人とされ、開戦当初は兵力で勝る佐賀側有利に展開した。鎮台兵、岩村権令は佐賀城から退却し、2月18日には筑後川の東（現福岡県側）に移っている。その後、熊本からの追加の兵力のほか、大阪鎮台兵も2月20日に博多へ着き、佐賀側は防戦一方となった。朝日山（現、佐賀県鳥栖市）から2月22日に退却したのを最初に、寒水（現、佐賀県みやき町）、田手川（現、佐賀県吉野ヶ里町）などで敗退し、徐々に西へと退却を余儀なくされる。北の背振山地では、三瀬峠、小爪峠（ともに現、佐賀市）などで政府軍を食い止めていたが、2月27日の境原（現、佐賀県神埼市）で佐賀側の敗退が決した。



図1 佐賀の乱関連地

- ① 神野公園（江藤新平像） ② 護国神社 ③ 龍造寺八幡宮 ④ 万部島 ⑤ 佐賀城本丸
 ⑥ 「佐賀の役殉国十三烈士の碑」 ⑦ 宝琳院 ⑧ 島義勇像 ⑨ 延命院
 ⑩ 小城城跡 ⑪ 実相院 ⑫ 朝日山 ⑬ 境原 ⑭ 蓮池陣屋跡 ⑮ 江藤新平乗船地
 ベースマップは5万分の1地形図「佐賀」（2001年）、Yahoo地図。



図2 万部島招魂碑

2019 年撮影。



図3 三ノ丸の「佐賀の役殉国十三烈士の碑」

2019 年撮影。

江藤は敗色濃厚になった 2 月 23 日に征韓党を解散し、西郷隆盛に会って援軍を乞うために脱出した。鹿児島に向かい、西郷に会うものの支援は得られず、さらに士族の決起を求めるべく高知に向かうが果たせなかった。東京へ向かう途上、高知・徳島県境の甲浦（現、高知県東洋町）で 3 月 28 日に捕縛された。一方の島も、2 月 27 日に島津久光に頼るために鹿児島に向かうが、3 月 7 日に捕縛された。

江藤、島は佐賀へ送られ、形式的な裁判で、4 月 13 日に除族の上臈示（梟首）という極刑判決を受け、即日処刑された。両人の首は千人塚（現、佐賀市）で晒されている。また、2 人とともに、幹部 11 名が斬首となっている。

(2) 佐賀の乱の現地と記念・顕彰 現在、佐賀城内には、佐賀の乱の佐賀側の死者を祀った 2 つの慰霊碑がある。1 つは佐賀側死者 261 人を祀る万部島招魂碑（図 2）で、1920（大正 9）年に建立された。全員の氏名を刻んだ碑も付属しており、毎年、神式の招魂祭が市長はじめ市関係者や遺族の出席のもとで続けられている⁹⁾。なお、この万部島招魂碑は、憂国党と征韓党が別個に建立した慰霊



図4 「江藤新平卿之像」

神野公園。2019 年撮影。

碑（憂国党招魂碑、1885 年、および、征韓党「明治七年戦死諸君之碑」、1886 年）を統合して建立されたもので、碑石そのものは征韓党の碑を移転して使用している¹⁰⁾。招魂碑の所在する万部島は、法華経を奉納した万部塔が建てられた、龍造寺家、鍋島家を通しての佐賀城の重要な場所である。こうした場所に招魂碑が建立（移転）した背景には、1916 年に、江藤に正四位、島に従四位が追贈され、2 人が完全に名誉回復を果たしたという経緯があった¹¹⁾。

もう一つの慰霊碑は、佐賀の乱における刑死者を慰霊する、「佐賀の役殉国十三烈士の碑」（図 3）である。「鯨の門を偲ぶ会」（会長：宮田虎雄前佐賀市長）によって、旧三ノ丸の佐賀県立博物館横に 1983 年 10 月に設けられた、新しい慰霊碑である。

これらのほか、城からほど近い佐賀県護国神社には、1953 年 4 月以来、江藤、島ら、佐賀の乱の佐賀側死者が祭神として合祀



図5 蓮池の佐賀の乱招魂碑

右が招魂碑，由来を記す碑もある。2019年撮影。



図6 佐賀城本丸鯨の門の弾痕

2019年撮影。

されている¹²⁾。また佐賀市内の神野公園には江藤新平^{こうの}の銅像が設けられ(1976年4月除幕式, 図4), 毎年4月には多くの来賓も参列して神事が執り行なわれており, 慰霊碑としての性格ももつ。

さらに, 佐賀鍋島藩の支藩がおかれ, 佐賀の乱に士族が参加した小城^{おぎ}(佐賀県小城市)と蓮池(佐賀市)にも, 佐賀の乱の慰霊碑が存在する。小城城(陣屋)跡には, 佐賀の乱における旧小城藩士13人の慰霊碑である「甲戌烈士之碑」が1898(明治31)年に建立された。また, 旧蓮池陣屋前(蓮池社参道)には, 旧蓮池藩の戦死者と蓮池藩出身で県の官吏として死亡した者の計10人を祀る招魂碑が1941(昭和16)年に建立されている(図5)。ただし, 双方ともに今日では祭祀は行われていない。

このように, 佐賀の乱に関連して, 多数, 多様な慰霊碑が建立されている。かつ, その中には今日まで半ば公的な祭祀がおこなわれているものもある。これは, フットによる負の記憶の景観化の4類型のうちの「聖別」に当てはまるようにみえなくもない。フットは, 記念碑は建てられるもののその場所が特に神聖視されることのない「選別」に対して, 記念碑・慰霊碑・記念行事などを伴って「英雄的行為や共同体のための自己犠牲」が積極的に賞揚される場合を「聖別」ととらえている。しかしながら, ここで注意しなければならないのは, ここまで検討した慰霊碑は, そのどれもが, 細かなスケールでみた場合, 佐賀の乱の戦闘が行われたり, 軍議がおこなわれたりといった意味での現地には当たらないということである¹³⁾。

佐賀城は, 確かに緒戦の重要な戦闘が行われた場所である。しかし, それは二ノ丸, 本丸であり, 城下町全体が戦場になったわけではない。招魂碑の立つ万部島は, 上述したように藩主家の聖地であり, ここで戦闘がおこなわれたわけではない。「佐賀の役殉国十三烈士の碑」も, 刑死者の慰霊という建立の主旨を考えれば, 刑場跡の二ノ丸¹⁴⁾であればわかりやすいが, 遠く離れているとはいえないものの, 無関係の三ノ丸に建てられた。護国神社, 神野公園も同様に, 佐賀の乱の現場ではない。一方, 本丸の鯨^{しやち}の門(図6)の解説板には「明治7年(1874)の佐賀の役で, 佐賀城は戦火に見舞われました。鯨の門にはその当時の弾痕が残り, 当時の戦闘の激しさがしのばれます」と簡潔に言及されているが¹⁵⁾, それ以外の記念碑などはない。

佐賀の乱の間, 征韓党, 憂国党がそれぞれ本営を置いた地は諸説あるようだが, 征韓党については実相院, 龍造寺八幡宮, 延命院, 憂国党については宝琳院があげられることが多い。しかし, それら



図7 朝日山の解説板（部分）

佐賀県鳥栖市。2020年撮影。



図8 「江藤新平君遭厄地」碑

高知県東洋町。忠魂碑など多くのモニュメントと同じ敷地にある。
2020年撮影。

佐賀の乱の記念・顕彰ではなく、佐賀の乱の現地がいかに関係・顕彰されているかという視点からみなおすと、現地はほぼ忘却され、記憶されていないといえる。フットの4類型では、名誉・不名誉の意義づけがされずに原状回復がなされた、「復旧」に該当するとみななければならない。その一方で、厳密には、つまり細かい空間スケールでいえば、佐賀の乱の現地とはいえない万部島、佐賀城三ノ丸、護国神社、神野公園、小城城跡、蓮池陣屋跡が、記念・顕彰の場になっている。そのずれを以下では考えたい。

Ⅲ 記念・顕彰の景観化の枠組

(1) 脱現地化 ここまで、佐賀の乱の景観のなかでの記念・顕彰について、2つの傾向があることをみてきた。すなわち、「現地の忘却」と、「他所での記念・顕彰」である。以下では、この2つの傾向から、佐賀の乱の記念・顕彰の景観化全体に共通する、どのような枠組があるか、読み解きたい。

まずは、前者の「現地の忘却」から考えたい。現地がほとんど記念・顕彰されず、「復旧」してい

のいずれにも、佐賀の乱との関わりを示す碑も、解説板もない¹⁶⁾。

佐賀城下以外の主要な戦場のうち、朝日山は公園化しており、2つの解説板で、中世の山城以来のこの山の歴史を概観するなかで佐賀の乱に触れられている（図7）。また、最後の決戦の地というべき境原でも、長崎街道境原宿の解説板で「なお、明治7年（1874）の佐賀の乱の境原戦により境原地区は全焼し、当時の町並みは失われています」と述べられているだけである。なお、境原のはずれにある六地藏が佐賀の乱戦死者の供養のために建てられたという

記述がいくつかの書籍にみられるが、必ずしも定着した記憶ではないと思われる¹⁷⁾。

直接戦闘に関わる場だけでなく佐賀の乱関連の場に対象を広げると、江藤の鹿児島脱出の際の乗船地と、江藤の捕縛地には、それぞれ解説板と記念碑がある。前者は佐賀市郊外、本庄江川の河港で、佐賀市内共通の史跡解説板があり、後者は前述の通り高知県東洋町甲浦で、地元の甲浦青年団による「江藤新平君遭厄地」碑（図8）が1917（大正6）年に建てられている¹⁸⁾。ただし、これらは、佐賀の乱関連というよりも、江藤個人の顕彰という側面の方が強いだろう。

このように、佐賀の乱の現地のうち、記念・顕彰がおこなわれている場所は非常に少ない。上の江藤乗船地・捕縛地を除けば、佐賀城鯨の門、朝日山、境原において解説板でわずかに触れられているにすぎない。他の戦場、本営の跡地には、解説板も碑もみあたらないのである。

ることは、佐賀の乱という出来事の軽視、忘却のように思えるかもしれない。しかし、むしろ逆に、現地の忘却は佐賀の乱の評価という難問を回避することに大きく関わり、ひいては佐賀の乱の記念・顕彰につながっていると考えられる。

そもそも佐賀の乱は、地元佐賀において、記念・顕彰しにくい出来事である。佐賀の乱では佐賀士族が佐賀側、政府軍の双方に加わっていたこと、佐賀の乱を士族「反乱」と位置づけるナショナル・ヒストリーとの齟齬・対立を避ける必要があること（あるいは、ナショナル・ヒストリーに打ち勝つだけのローカルな物語創出に成功していないこと¹⁹⁾）を考慮すれば、佐賀の乱を正の記憶として、つまり肯定的な価値をもつ出来事として顕彰し、記念碑などを現地に建てることは難しい。一方で、負の記憶として、国家に対する「反乱」を反省し、再び起こさぬように警告するなど、積極的に位置づけられ直すことはなおさら考えにくい。ただ、負の記憶でも慰霊はもちろん可能であるが、佐賀の乱の場合、慰霊碑すら現地を忌避している。おそらくは、現地にまわりつく恥辱、死やネーションへの反乱という重い生々しさを払拭しているのだろう。

佐賀の乱が正の記憶としても、負の記憶としても位置づけにくいことと、現地の忘却、すなわち現地には中立的で簡潔な記述の解説板が一部にあるのみであることは、一体の事態であると考えられる。もし、現地に記念碑を建てる計画がもちあがっていれば、文言をめぐる対立があったと予想されよう。佐賀の乱の評価をめぐる無用の衝突を防ぐためにも、現地の忘却が望ましかったと考えられる。

さらに、現地の忘却は、「他所での記念・顕彰」につながっていると考えられる。上でみたように、佐賀の乱の現地とはいえない場所に戦死者や刑死者の慰霊碑などが設けられ、記念・顕彰行事がおこなわれてきた。慰霊碑が非現地化するのには、上述したように、まずは現地を忌避した結果であると考えられるが、それ以外の理由については次項で検討する。また、戦死者、刑死者の慰霊に絞ることは、佐賀の乱の評価を下さずに悲劇性を強調することを可能にしていよう。こうした、「他所での記念・顕彰」は、あたかも「現地の忘却」の代替のようにみえる。現地から離れ、慰霊に限定することで、佐賀の乱は景観のなかで何とか記念・顕彰できているというべきである。

こうした非現地化された慰霊の延長上に、佐賀の乱の2人の中心人物、江藤新平、島義勇の顕彰を位置づけることができる。前項でみたように、神野公園の江藤銅像（1983年）は祭祀の場であり、慰霊碑としての側面をもつ。彼ら2人の明治政府における功績、とりわけ江藤のそれを強調することで、佐賀の乱そのものの評価を回避しつつ、佐賀の乱の悲劇性が強調され、ひいては（明示されないが）彼らの正しさを印象づけているようにすら思われる。江藤の乗船地、捕縛地での記念・顕彰については上述した。江藤と島それぞれの生家跡や墓所には解説板があり、神野公園の江藤銅像に加えて、2018年には佐賀城西門外の堀端に島の銅像も建立された（図9）。他に、維新150年（2018年）に際して佐賀中央通りに銅像が設置された佐賀の偉人25人に2人も含まれ、景観のなかでの2人の顕彰は近年も進んでいる。以前からある江藤銅像を除き、それらの像のプレートで佐賀の乱に言及されることはない。

しかし、2人を顕彰、慰霊することは、彼らを反逆者



図9 「島義勇之像」

2020年撮影。

とみなすことへのアンチテーゼなのである。

以上、佐賀の乱に関する記念・顕彰の景観化にみられる 2 つの傾向、「現地の忘却」と「他所での記念・顕彰」を読み解いてきた。ここからは、佐賀の乱に関する記念・顕彰の景観化全体に共通する枠組として、まず、「脱現地化」をみいだすことができよう。

出来事が起こった現地を重視する、史跡顕彰の一般的な発想からは、佐賀の乱の記念・顕彰は、全くひどい、問題外の状況のように思える。しかし、単なるマイナスの事態ではなく、佐賀の乱の記念・顕彰しがたさに抗するため、戦略的に現地から離れた結果であることが明らかになった。「脱現地化」によって、評価が定まらず、現地での記念・顕彰に難のある佐賀の乱を、非現地の慰霊に限定したうえで、景観のなかに記念・顕彰することが可能になっているといえる。

(2) スケールのジャンプ 佐賀の乱における記念・顕彰の景観化を貫く枠組としてもう一つ提示できるのが、「スケールのジャンプ」である。ここでいうスケールとは、世界、国家、地方、県、市町村、近隣、住宅、…といった様々なレベルの地理的スケールのことである²⁰⁾。山崎は「スケールの政治」の特徴としてスケールのジャンプを位置づけており、「一つの地理的スケールで確立された政治的要求や権力が別のスケールに拡張されること」と、スケールのジャンプを定義している²¹⁾。つまり、ある集落の産廃処理場反対運動が市全体、さらには県の問題となっていくようなことがその典型例であろう。ここでは、このスケールのジャンプをやや広く、ある地理的スケールにおける問題が、その上位の地理的スケールにおける問題として位置づけられるようになることと定義しておきたい。

佐賀の乱の記念・顕彰においては、前項でみた「脱現地化」と、この「スケールのジャンプ」が重複してみられる。すなわち、前項で他所での記念・顕彰として確認したことであるが、佐賀の乱の現地を離れ、万部島、神野公園といった特別な場所が記念・顕彰の場になることに、スケールのジャンプも関わっていると考えられる。では、なぜそれがスケールのジャンプといえるのか説明しよう。

まず、佐賀の乱の個々の現地（戦場など）という地理的スケールで、実際の戦闘などの出来事が発生した。これを、個々の現地の出来事としてのみとらえるのではなく、佐賀城下町、佐賀市、佐賀県など、上位の地理的スケールにおいて意義ある出来事として表象すること、これがここでいうスケールのジャンプである。慰霊碑の建立など、特定の場所における記念・顕彰の場合、上位の地理的スケールにおいて位置づけるとは、それぞれの地理的スケールにおける重要な場所、象徴的な場所で記念・顕彰をおこなうということになる。

招魂碑の建てられた万部島は藩主家の聖地であり、江藤銅像のある神野公園は藩主の別邸跡である。また、「佐賀の役殉国十三烈士の碑」は旧三ノ丸の県立博物館横で、建立当時は佐賀城本丸周辺で最も整備された一画であった²²⁾。上位の地理的スケール、つまり佐賀城下町、佐賀市、佐賀県で位置づけ直すために（＝スケールのジャンプ）、佐賀城下町、佐賀市、佐賀県にとって重要で象徴的な場所が選ばれ、建碑がなされたといえる。スケールのジャンプによって、佐賀の乱という出来事はより重要な出来事として、またその記念・顕彰はより高いレベルで実施されるべきものとして位置づけ直されている。なお、小城と蓮池の慰霊碑が、それぞれ旧城内・旧陣屋前という、それぞれの地域における重要な場所に設けられていることも、スケールのジャンプの結果とみることができよう。

このように、スケールのジャンプを、佐賀の乱における記念・顕彰の景観化全体に共通する 2 つ目の枠組として確認したところで、フットによる負の記憶の景観化の分類に戻ってみたい。フットの「聖別」、「選別」、「復旧」、「抹消」という 4 類型に基づいて佐賀の乱の記念・顕彰をみると、「聖別」か、

「復旧」か、一見すると迷う事態であった。現地をみれば「復旧」である一方、実際に慰霊碑があり半ば公的な祭祀が続けられていることにこだわれば「聖別」と判断したくなる。こう迷うのは、佐賀の乱の記念・顕彰において、スケールのジャンプが起きていたからだといえる。地理的スケールという視点を導入することによって、現地というスケールではおおむね「復旧」、上位の地理的スケールへとジャンプすることで「聖別」と、区別してとらえられる。

フットも、記念・顕彰が複数の地点でおこなわれることには当然注意を払っている。すなわち、過去4人のアメリカ大統領の暗殺事件の分析では、例えば、マッキンリー大統領暗殺地点にはごく小さな標石しかない一方、事件が起こったバッファローの市役所の前に大きな記念碑が設けられていることを示している²³⁾。これは、佐賀の乱の検討にならえば、現地在「選別」、ジャンプしたスケールで「聖別」とみることができよう。フットは、そのように複数の地点ごとに別の類型とみなすことに慎重であるようで、また、複数の地点を地理的スケールという視点からとらえてもいない。しかし、ここまでみてきたように、地理的スケール、スケールのジャンプという視点は重要である。スケールのジャンプという記念・顕彰景観化の枠組をふまえて4類型を適用することで、アメリカ大統領暗殺事件にせよ、佐賀の乱にせよ、記念・顕彰の景観化の差異はより明確になるといえる。

IV おわりに

本稿は、負の記憶としての佐賀の乱について、景観のなかでの記念・顕彰に着目し、考察を行った。まず、佐賀の乱の戦場など現地には簡単な解説板が一部にあるのみであること、一方で、現地を離れた慰霊碑などが複数みられることを確認した。そして、佐賀の乱における記念・顕彰の景観化全体に共通する2つの枠組として、「脱現地化」と、「スケールのジャンプ」があることを論じた。まず前者について、佐賀の乱は評価が定まらず、正の記憶としても、負の記憶としても、現地での記念・顕彰は難しい。しかし、佐賀の乱の現地ではなく、非現地の慰霊に限ることで、評価を回避しつつ佐賀の乱を記念・顕彰することが可能になっている。次に後者について、佐賀の乱は、個々の戦場という地理的スケールから、佐賀城下町、佐賀市など上位の地理的スケールにジャンプして位置づけ直され、万部島、神野公園など佐賀城下町、佐賀市にとって重要な場所で建碑がおこなわれている。さらに、これに関連して、フットによる負の記憶の景観化の「聖別」、「選別」、「復旧」、「抹消」という4類型について検討した。佐賀の乱の現地は「復旧」だが、スケールのジャンプによる上位スケールでは「聖別」となり、スケールのジャンプを考慮して4類型を適用する必要があることが確認された。

今後は、負の記憶に関わるモニュメント、またフットの4類型について、他の地域、別の種類の記憶の事例を取り上げ、さらに考察を進めていきたい。

注

- 1) こうした研究は数多いが、例えば、荻野昌弘編『文化遺産の社会学：ルーブル美術館から原爆ドームまで』新曜社、2002、拙稿「長崎原爆落下中心碑にみるモニュメントの構築」九州地区国立大学教育系・文系研究論文集 5(1)、2017、No.15 など。
- 2) 今井昭彦「佐賀の乱における戦死者祭祀」（今井昭彦『近代日本と戦死者祭祀』東洋書林、2005）145-196 頁。

- 3) フット, K.E. (和田光弘ほか訳)『記念碑の語るアメリカ：暴力と追悼の風景』名古屋大学出版会, 2002 (原著 1996)。
- 4) 佐賀の乱の経緯に関する以下の記述は、主に『佐賀市史』、『佐賀県史』により、一部を『江藤新平』で補った。①佐賀市編『佐賀市史下巻』佐賀市, 1952。②佐賀県史編纂委員会『編佐賀県史下巻近代編』佐賀県史料刊行会, 1967。③星原大輔『江藤新平』佐賀県立佐賀城本丸歴史館, 2012。
- 5) 前掲 4) ③95 頁。
- 6) 前掲 4) ①209 頁。
- 7) 前掲 4) ②67 頁。
- 8) 毛利敏彦『幕末維新と佐賀藩：日本西洋化の原点』中央公論新社, 2008。
- 9) 江藤らの処刑がおこなわれた 4 月 13 日に実施されていたが、2016 年から前日の 4 月 12 日になった。おそらくは護国神社大祭と日程をずらすためと思われる。
- 10) 憂国党招魂碑は佐賀市与賀町川原小路(護国神社付近)に、征韓党の碑は旧城内西の門にあった。前掲 2) 169 頁。
- 11) 明治憲法発布の大赦令で、江藤、島の罪名は消滅していた。前掲 2) 171 頁。
- 12) ただし、慰霊碑等には合祀は明示されておらず、靖国への合祀もおこなわれていない。
- 13) 厳密に現地かどうかはいわば程度問題であり、記念碑や解説板の位置が少々ずれるのは当たり前であるが、ここではそういうずれを問うているのではない。後述するように、何か理由があって、現地を離れたり、他の場所に引き付けられたりしていることを問題としている。
- 14) 現在はレトロ館西隣の大型バス駐車場。
- 15) 隣接するもう一つの解説板にもほぼ同内容の記述がある。
- 16) 実相院(佐賀市大和町)は、佐賀市観光協会の観光パンフレットでは佐賀の乱の慰霊碑所在地として紹介されているが、そのような碑はない。実際にあるのは日露戦争の慰霊碑である。
- 17) 佐賀の乱に結び付けた記述がある例として、河島悦子『伊能図で甦る古の夢長崎街道』長崎街道まちづくり推進協議会, 1997, 84 頁, 松尾卓次『長崎街道を行く』葦書房, 1999, 115-116 頁など。現地にそういった解説が付されているわけではなく、『千代田町誌』などの郷土史類にはそうした記述は管見の限りみいだせない。広江大元『千代田町誌』千代田町教育委員会, 1974。
- 18) 江藤が捕縛された副戸長浜谷清澄宅は、この記念碑から東に 300m ほど離れていた。しかし、江藤の一行がおそらくこの碑の付近(番人の家の前である)で最初に番人にみとがめられていること、碑に「...遭厄地」とあり現地への建立が意識されていることを考え合わせると、ここを現地とよんでもおかしくはないだろう。寿美金三郎『甲浦物語』東洋町, 1968, 41-46 頁。
- 19) この点は、鹿児島における西南戦争とは違う。鹿児島でも決して一つの見方にまとまっているといえないだろうが、西郷隆盛の神格化など、佐賀よりは固まっているように思われる。
- 20) 人文地理学において、スケールは「特定の社会的プロセスをとおして形成される空間の単位や規模」と定義される。山崎孝史『政治・空間・場所：「政治の地理学」にむけて(改訂版)』ナカニシヤ出版, 2013, 124 頁。
- 21) 前掲 20) 134 頁。
- 22) 現在のように整備されるおおむね 2000 年以前、本丸は小学校の敷地であり、二ノ丸は人家が密集していた。
- 23) 前掲 3) 38-46 頁。